2023年10月24日（火）物流ニッポン新聞社

琉球通運

コンテナ位置「見える化」

稼働状況 GPSで一元管理

琉球通運（喜納秀智社長、沖縄県那覇市）は、GPS（全地球測位システム）端末と通信装置を利用したリーファーコンテナの動静管理システムを導入し、コンテナの位置・稼働状況を「見える化」して作業効率や生産性を高めている。

GPSと、省電力長距離通信技術「SIGFOX」の通信モジュールを組み合わせた端末をリーファーコンテナの発電機に装着。コンテナから発信された情報をクラウドサービスを経由して一元管理できるようにした。

現在、20フィートコンテナ14個、40フィートコンテナ30個に装着。海上輸送中は船舶情報会社のマリントラフィックが提供する船舶位置情報とリンクさせ、稼働情報をシームレスにつなぐ。

海上輸送課の小橋川崇氏は「システム導入後は現場の社員が目視や電話、パトロールで行っていたコンテナの数、稼働状態の確認作業が大幅に削減された。コンテナの適正数の予測・確認の作業がデジタル化されたことで分析の精度が上がり、経費削減と売り上げ増につながっている」と効果を話す。

GPSを装着したリーファーコンテナ

9月から、新機能としてコンテナ稼働ステータスの自動更新システムを開発している。「予冷中」「集荷中」「輸送中」「配達完了」などのステータス更新は現在、作業員がスマートフォンでコンテナのQRコードからシステムにつないで手動で更新している。今後、位置情報から稼働状況を割り出し、自動更新する仕組みに変える。手動入力で生じていた年間1千万円の事務処理費をゼロにする。

更に、貨物の出荷元と入庫先が、コンテナの位置情報や稼働状況をインターネット経由でリアルタイムに追跡できる体制を整える。個別番号を入力すると対象のコンテナが地図上に示され、入荷明細や積荷明細も表示される。顧客と輸送情報を共有することで、信頼獲得につなげていく。

（上田慎二）